



7 海野勝珉《蘭陵王置物》一点

明治二十三年（一八九〇） 銅・金・銀／象嵌
二八・〇×三二・〇×三三・五

舞楽「蘭陵王」の演者をかたどった置物である。装束の各部を鍛造により成形し、装束の文様を毛彫、高肉象嵌など様々な手法で緻密に表現している。陵王の面は実際に取り外しができるようになっており、面の下には演者の端整な容貌が鑄造によって表されている。また本作は、頭部、袖襦、両腕、両足など、複数のパーツを組み上げて製作しているが、その接合の仕方が精巧に行われており、外観からはほとんどわからないように見事に仕上げられている。通常の鍛造による置物製作の場合、本作が出品された第三回内国勸業博覧会の審査報告には、同博に伊藤勝見が出品した《観音像》のように、半分に分割して成形したものを鑲付するのが正攻法であると記されている。それに対し、海野が採用したこの組立方法は専門家にもかなりの驚きを与えたらしく、同審査報告にも「其術至難ニシテ近代ノ彫工之ヲ爲ス者アラス」と最高の評価が寄せられた。「工藝志料〇帝室技藝四 海野勝珉氏」（『京都市美術協会雑誌』第五十五号、明治二十九年十二月）によると、本作の製作には三年の歳月がかけられたと記され、その製作法に苦心を重ねていたことがうかがえる。しかし、その成果として、本作は当時最高の評価を獲得して海野の出世作となり、のちには明治期の彫金を代表する作品ともなった。

本作は明治二十三年に開催された第三回内国勸業博覧会に美術商・林九兵衛により出品され、一等妙技賞を受賞、宮内省に買い上げられた。なお、唐櫃形の面箱と蘭陵王を載せる台は、木工家・木内半古（二八五五〜一九三三）の作で、黒檀地に染象牙を象嵌して牡丹唐草文があしらわれている。台の木地は長谷川良一が担当した。

海野勝珉（一八四四〜一九一五）は水戸に生まれ、伯父である初代海野美盛（一七八五〜一八六二）と萩谷勝平に師事した。絵画を安達梅溪、書を武庄次郎に学んだ。明治元年（一八六八）に東京へ出て、第一回および第二回の内国勸業博覧会に出品して褒状を受賞し、彫金界で頭角を現した。その後、本作を発表した同二十三年に加納夏雄の門下に入り、同二十七年に東京美術学校教授に就任、同二十九年には帝室技芸員に任命され、明治後期の彫金界における第一人者となった。

面は赤銅の地板に金の板を鑲付し、それを打ち出して成形している。頭髪と歯は赤銅の地板を成形して線彫したもの。眼球も赤銅で別に作り、動くように面に取り付けられている。頂きの龍は四分一で鑄造し、主に金色絵と鍍金して細部を作り、面本体に取り付けられている。



面箱と面、桴(ばち)

面左下の銀板刻銘
「海野勝玳作」







素顔は四分一の鑄造で作られ、頭髪は鑲付された赤銅で表されている。また、眉は赤銅、瞳は赤銅と四分一を象嵌している。頭部の牟子(むし)は銅を鍛造して、四手雲の地文様を金で平象嵌している。このような独特の赤みのある銅は火銅と言われ、特殊な銅合金を煮込み着色で仕上げたもの。

足裏の銘





裨褙(りょうとう)は銅を鍛造しており、周囲に銀で铸造した房飾りを鑲付し、部分的に金銀でリベット留めしている。裨褙の文様のうち、龍は金、龍を取り巻く円は銀で高肉象嵌され、散雲の地文は金、銀、四分一、赤銅などで高肉象嵌されている。腰で結ばれている紐は、紐の部分と房の部分で色味の異なる銅で作分けられている。手は四分一の铸造である。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

明治の彫金―海野勝珉とその周辺

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 41

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十八年九月二十三日発行

© 2006, The Museum of the Imperial Collections